

つかさどる人の NEWS

NO.40
2016.12 発行

(公財)日本生態系協会
ランドデザイン総合研究所

〒171-0021 東京都豊島区西池袋2-30-20 音羽ビル
tel.03-5951-0244 <http://www.ecosys.or.jp>



川から始まる 魅力ある地域づくり

自然再生をしている円山川流域（兵庫県）に飛来するコウノトリやサギなどの野鳥。
このすばらしい風景を観光の目玉として活かすアイデアも川づくりに必要な要素です

川は多くの生きものの命を支えるとともに、変化に富んだ多様な自然や潤いのある景観を形づくりまします。また、絶え間なく流れる水は、飲み水のほか、流域の農業や工業などで利用されています。このように川は私たちの暮らしと深く関わり、様々な恵みをもたらす生存基盤として重要な役割を担っています。良好な自然環境や景観の形成、水資源の安定供給などの、川が持つ様々な機能を活かす土地利用をより広域で実現していくことは、地域づくりの国際的な潮流となっている「持続可能な地域」を実現するうえでも重要な視点です。

川を活かした地域づくりを進めていくうえで、近年の温暖化に伴う異常気象への対応も重要です。平

成27年に発生した関東・東北豪雨では、一級河川鬼怒川の堤防が決壊し、流域で大規模な浸水被害が発生しました。今後も温暖化が急速に進むことが予想されており、局所的な豪雨の増加により、既存の治水施設では防ぐことができないような大規模な氾らんや土砂崩れなどの災害の頻度が高まることも予想されます。こうしたことから、流域の視点から抜本的に治水対策を変える必要があると言えます。

今号では、持続可能な地域を支える基盤としての川のあり方について、国土交通省などが中心となって進めている「川を軸とする生態系が有する多様な機能を活かして、地域の課題解決や経済振興を目指す川づくり」の事例をご紹介します。

川の豊かな自然を地域づくりに活かす

川は、森林や草地、海岸などの多様な自然をつなぐ、軸となる環境です。川を含む水辺には様々な生きものが生息・生育し、良好な自然や景観が形成されます。平時は散策や環境学習などの場として、増水時には氾らん原として機能します。川が有するこれらの機能は、その基盤となる「川を軸とした自然のつながり(生態系ネットワーク)」が健全な状態で維持されていることで発揮されます。

川の自然の保全・再生については、これまで多自然川づくりや自然再生などの取組が行われてきましたが、これからはそれをさらに、川を軸に据えた流域の土地利用の中で捉え直し、地域の課題解決や経済振興と一体で進めていく視点が重要です。現在、荒川や利根川(関東)、円山川(兵庫県)などの流域では、治水対策と一体で湿地などを創出することにより、流域の自然とのつながりを回復する取組が行われています。いずれの地域でも、コウノトリなどの生きものを自然との共存のシンボルに掲げて、多様な主体の連携のもと、豊かな自然を活かしたブランド農産物の生産・販売やエコツーリズムの推進などの取組が行われています。

■豊かな水辺のイメージを活かした「生きものブランド米」づくり(関東地域)

関東地域では平成 22 年に「コウノトリ・トキの舞う関東自治体フォーラム」(現在 30 自治体が参加)が、平成 26 年には同フォーラムの代表自治体や関係省庁、市民団体などで構成される「関東エコロジカル・ネットワーク推進協議会」が設立され、都市化とともに失われた豊かな水辺環境の再生を治水対策などと一緒に取り組んでいます。そのシンボルとして、平成 27 年 7 月に千葉県野田市において、関東では初となるコウノトリの試験放鳥が行われました。放鳥されたコウノトリは、飛来先の地域で大きな関心と注目を集めており、自然と共存した地域づくりをより広域に展開する起爆剤となることが期待されています。

現在、野田市や鴻巣市(埼玉県)、小山市(栃木県)、いすみ市(千葉県)などでは、地域の立地や環境特性に応じて、水田魚道の設置、近接する雑木林の保全な



化学合成農薬や化学肥料の使用を控えるなど、生きものの生息・生育に配慮した農法で生産された米

ど、生きものにやさしい地域づくりが進められています。また、豊かな自然環境やそこにすむ生きものをシンボルとした農産物が付加価値をつけて販売されるなど、自然の豊かさや安心・安全を前面に掲げた商品への注目も高まっています。

■コウノトリも住めるまち(兵庫県豊岡市)

豊岡市では、昭和40年代に国内で野生絶滅したコウノトリとの共生をシンボルに掲げたまちづくりを展開しています。同市内を流れる円山川の流域では、治水対策で川を掘削する際に、掘削のしかたを工夫してコウノトリの生息に配慮した水深の浅い湿地が創出されました。

また、支流や農業用の用・排水路と水田の間の落差がある箇所への水田魚道の設置や、無農薬栽培などにも取り組んでいます。生きものにやさしい方法で生産された米は「コウノトリ育むお米」としてブランド化され、国内はもとより海外にも販路を拡大しています。



コウノトリをモチーフにしたバス停。来訪者の興味を引く「しかけ」が随所で見られます(豊岡市)

このほかにも、既存の観光拠点や食などの地域資源をコウノトリが飛来する豊かな自然のイメージと関連づけて一体的にPRする「コウノトリツーリズム」の推進や、環境保全に理解のある企業の誘致など、全市を挙げて「コウノトリも住めるまち」の実現に取り組んでいます。その結果、今では年間約30万人がコウノトリを目的に来訪するようになりました。豊岡市では、市内に点在する地域資源を“物語としてつむいで魅せる”ことで、潜在的な観光ニーズを引き出すための様々な試行が重ねられています。



コウノトリを自当てに多くの観光客が豊岡市を訪れます



千葉県野田市が放鳥したコウノトリ(茨城県坂東市)

米国イリノイ州ケーン郡はシカゴ近郊に位置し、比較的平坦な一帯は主に農耕地として利用されています。ケーン郡では持続可能な地域発展を実現するため、グリーンインフラの考え方により自然地を計画的に保全・再生しながら利用するための計画を策定しています。郡内のグリーンインフラのネットワークは水系や森林分布、人口密度など様々な情報をベースに有識者による検討を重ねて作成されており、民間事業を含めた様々な開発計画の基礎になっています。

川の自然再生と それによりもたらされた地域への波及効果

ケーン郡の中心都市、オーロラ市はかつて工業で栄えた都市ですが、企業の海外移転などに伴い地域の経済環境が悪化し、汚染された川だけが残されました。そのような状況を目の当たりにしたオーロラ市長は、持続的なまちづくりを実現するためにはグリーンインフラが重要な役割を果たすと確信し、意欲的に自然再生を軸としたまちづくりに着手しました。

オーロラ市では、川の自然が持つ経済的な価値を認識し、川沿いの工場跡地に残された産業廃棄物を撤去するなど、環境改善事業を積極的に実施しました。そして、川がきれいになったことで、川に人のにぎわいが戻ってきました。一部の工場跡地は新たに公園へと生まれ変わり、コンサート等のイベントも開催されています。そのことで新たな雇用が創出され、消費が活性化されるなど地域経済へも良い影響を与えています。オーロラ市のグリーンインフラの取組について市長は「全米をリードしていく」と力強く語っていただきました。



写真に写っている絵には、自然再生の結果、再び息息するようになった生きものが描かれています。

※写真左から、この絵を描いたケーン郡職員 ウィリアムソン氏、日本生態系協会 吉屋アメリカ事務所長、同 池谷会長、オーロラ市市長 ウエイズナー氏、同 市長室 グスマン氏

グランドデザイン総合研究所は、自然と共存する美しいまちづくりの方法を、行政や議会、市民に提案するシンクタンクです。

お気軽にご連絡ください。

(公財) 日本生態系協会

グランドデザイン総合研究所 tel. 03-5951-0244

- 50年先、100年先の世界にひとつのグランドデザイン作成
- 海外の先進事例に関する情報提供
- 国の事業を活用した自然と共存する持続可能なまちづくりの提案
- 海外視察ツアーの企画・コーディネート
- 行政職員や市民向けの研修会や講演会への講師派遣
- あなたのまちをテーマとした国際シンポジウムなどの企画・開催